



# サンプル【回復のミルク】

いば神円(しんえん)



えっちなことになるヒロイン…ミルク♀(牛獣人)

ショート焦げ茶髪、洗めの青瞳。耳は垂れ獣耳。丸い角が二本。背は、そんなに高くないが爆乳。この世界の獣人らしい性格と田舎出身で世間知らず。押しに弱い。

スキル能力【回復の乳】を持っており、ど田舎から自分のソレを販売しようとしてきたが盗賊に襲われて自警団に助けられたので回復術士(病気は回復できない)が風土病で寝込んでいる事情を知り役に立とうと乳の提供を提案(善意)、色々えっちな事になるけど働き先が見つかるぞ！

一人称・私

お相手…トルウ♂

金髪碧眼。優男の見た目だけど筋肉はある。

自警団の補佐兼、交渉(、) 経理など色々がんばっている青年。団の向上も兼ね

て薬剤に興味があり回復術士が風土病で寝込んでいる今、より研究に力を入れていた。ミルクのスキル【回復の乳】に一番に興味を示し他を説得して研究しようとしたら先に性欲が出てしまった。ちよい我儘な腹黒。

一人称・僕

お相手2：ガイラス♂（自警団副長）

長め三つ編みの明るめ赤髪、赤瞳。口調粗めで粗暴そうだが光属性の魔力持ち。回復は出来ないが浄化や毒耐性に強い。

可愛くて爆乳で優しそうな、こんな都合の良い存在が男所帯に簡単に来るわけがないので何処かの組織のハニートラップだとミルクを疑い監視し強めの言葉で嫌がらせをして追い出すつもりだったが性欲に勝てなかった。ツンデレデレ。

一人称・俺

お相手3：カミア♂(回復術士)

草色髪、黒瞳。回復専門なので皆ほどムキムキじゃない。

風土病で寝込み中のカミア。怪我は治せるが病気は治せない為、日々苦しむ中、ミルクに乳を飲まされ良い夢だと思つて手を出したら現実だった。普通っぽい良い人。

一人称・オレ

お相手4：ダスアン♂(自警団隊長)

薄茶の髪、緑の瞳。

開拓中の辺境の地では今だ女性率は低いしガイラスの疑い通りハニートラップだとしても引き込んで身内になれば良いだろうと様子見をしていたら気づくと手を出していた。一応、気づかうけど合理的な性格。

一人称・普段は私、余裕がなくなると俺。

お相手5 沢山の団員達(モブ)

爆乳おっぱいだ！ 盛り上がる面々。吸って良いなら、そりや吸うし、えろい  
空気になるよね！ 皆元気に孕ませようとしてくるよ！

『ドラゴンの気まぐれ』が起きた。それは長寿の生物故の解り合えなさから起きる災害で生きとし生けるモノの一つである彼らが悪いというワケではない。ただ感覚の違いが埋まらない深い深い溝なだけなのだ。

「……私、出稼ぎに行くよ」

「ねえちゃん！」

広く食糧だけは豊富だった村の畑は逃げた高台から見渡せば、ほぼ全滅していた。豊かな色とりどりの収穫目前で、こうなってしまえば今年の冬が越せるか怪しい。

絶望に打ちのめされている村の人々。しかし落ち込んでいても冬は越せないし命があるだけマシとも言える。村の占い師が先んじてドラゴンの気配に気付いたからこそ免れる事が出来た貴重な命だ。

長い眠りから目覚めたドラゴンは彼らの村の上空を渡りの一つとして進み。

喉の詰まりを感じたのだろう。三度ほど咆吼しスッキリした様子で飛び去っていく。

その咆吼が、この悲劇を生んだ。

ドラゴンの喉から炎のブレスが吐き出され辺り一面、焼け野原と化す。時間にしては数分も満たない。村の機能は壊滅し厄災は過ぎ去ったが残された者達は、ただただ、これから生きる術に悩むのだった。

ぼつ、ぼつ、ぼつ……ザアアアアア……！

森の天候は変わりやすい。長い旅をしていた彼らも、それは分かっていたが今日に限って雨足は強く。土はぬかるみ荷馬車が動きを止める。全員が下りて馬車を押し前に進む中、ふと顔を上げればフードの中から瞳が動き。弟が姉の腕を引き、荷馬車から静かに移動させる。

彼らの財産が乗っていた荷馬車だったが動きを止めて後ろ側の太い木の影に隠れば途中で同じく出稼ぎに行くが増えた同業の者が泥水に膝を付き、ぼしやつと倒れた。霧と大きな雨粒の間から何かが見え。次の瞬間には煩い雨音に混ざって人々の喧騒が響き出す。

「盗賊だ」

「……っ」

弟は占い師ほどでは無いが勘が良く。姉は彼に促され森の内側へと入っている。幸い雨足は非常に強く。歩いた側から足跡が失われていき逃げることは可能だろう。

「あの道具類が無いと……」

予定していた街での販売は難しくなるだろう。

「命の方が大切だよ」

「そう……そうよね」

姉は領いて弟と共に慎重に、一歩、一歩下がっていく。

「あまり道から外れすぎるとも良くないぞ」

「っ！」

弟が腰の刃物を抜き二人の後ろで声をかけた男に振るうが男は簡単にソレを止めると苦笑いを浮かべた。

「すまない。驚かせてしまったね」

姉と弟の肩を抱きしめるように引き寄せ男は言う。

「私は今、君達が進む先の街、その自警団団長、ダスアンだ。よろしく。生き残っていたら温かい夕食でも、ごちそうしよう」

そう言つて二人から腕を離すとダスアンは前へ進み出る。その後ろから、ダスアンとよく似た服装の面々が体感の取れた動きで彼らを通り過ぎていく。

カキンッ！

金属が強く触れ合う音がして喧騒は、より激しさを増す。嘩然と見つめる二人は雨の中、身を寄せ合い成り行きを見守るのだった。

\*\*\*

国境の要となる街、ロスワーム。その街には独自の文化から生まれた自警団が存在し彼らが街の治安を守っている。そして、そんな自警団達には現在困った事が起きていた。

珍しい回復術士のカミアは優秀で彼さえいれば大きな怪我を負おうと、どうにか出来てしまう。しかし、そんな彼が風土病にかかってしまい現在、回復術が使える者がいない。

元々の回復薬など昔ながらの物はあるが治安維持の強行、獣狩りなど街の食糧の調達の、ちよつとした荒い動きがし難くなつてしまつたのだ。

カミアに頼りすぎてしまつたと反省しつつ今は回復薬のみで何とかしてこゝうとなつていた最中。何と解決方法の方から歩いてやつてきたのだつた。

「私も回復と類似した能力を持っていますので是非、使つてください！ 術士様が目覚めるまで微力ながらも役に立てると思います！」

客間のソファ―に座つた牛獣人の彼女が、ニコニコ良い笑顔で、そんな事を言う。

「そうか……その、もう一度……んんつ、聞くのだが……本当に、本当に君は良いのだろうか？」

「はい！ 皆様に助けて貰えた恩を、こゝうして果たすことが出来れば幸いです！」  
自警団団長であるダスアンは少し戸惑いの表情を浮かべながら再度、彼女に訊ねたが、どうやら本気という事が分かり大きく息を吸つて薄く吐き出してい

く。

「僕は非常に興味があります。ダスアン団長、良ければ僕に一任してもらえないでしょうか」

「トルウがか？　そうか……まあ、本人もやる気があるようだし」

「本気ですか団長」

決定に移行しようとし隣から全身で不服そうな雰囲気を漂わす男が声を出した。

「ガイラスも何か意見が？」

「俺は……」

ガイラスが何か言いかけて出入口で中の様子を見ていた自警団の部下達が、わっと声を上げる。

「賛成！　賛成！　賛成！」

「やった！　女性だ！　しかも可愛い！　でかい！」

「女神よ……奇跡をありがとうございます……」

「良い匂いがする……♡」

「嬉しすぎる……♡」

「あ、あのミルクさん！ 恋人って、いらっしやいますか!？」

「ぼかつ、おま、抜け駆けは」

「黙れ、お前ら!」

ガイラスが大きく声を上げると騒いでいた部下達、面々は、キョトンとした表情で言動を止める。

「おいおい……まさかとは思うが……全員、賛成のつもりか？」

「むしろ反対の方が難しいんじゃないかな」

トルウが薄く微笑みを浮かべて言う。

「お前なあ!」

「まあまあ、とりあえず、ここは挙手で聞いてみよう。あく……ミルク君が臨

時で協力してくれるに賛成の者」

ザツ。

ガイラスとダスアン団長以外は全員手を上げて、一様にニコニコ、デレデレ。

「っち」

それを見て、ガイラスは嫌そうに舌打ちをしたのだった。

☆☆☆間☆☆☆

ガイラスの大きな声に情事の空気が薄れていく。

「いいか、良く聞け！」

バツとガイラスに指を刺されるトルウ。

「こんな……こんな可愛くて巨乳で、しかも乳に回復のスキルを持っているだ  
と？ その上にだ、こんな……むさ苦しい男所帯の中、善意で働きたいだあ？  
そんな女神みたいな女が存在するわけねーだろうが!!」

そんなガイラスの忠告に白けた雰囲気のとルウは真顔で言う。

「……ガイラス、告白しに来たの？」

「はあ!? なんて、そーなる!？」

「そうとしか聞こえないからかな」

二人の不穏な空気にミルクは冷や汗を滲ませるがガイラスは無視をして机を指差す。

「いいかつ！ この乳の効能だって……飲んでみりゃわかる」

ミルクに視線を向けられない様しながら机に近付き上にある乳が並々注がれた瓶の一つを手にとってガイラスは勢い良く飲み出した。

「……俺は毒耐性も強いし見抜いてやるよ」

ゴクゴク、ゴクンツ！

「……毒では無いが別に、うっ」

飲み終わり何やら戸惑いの表情になるガイラス。しかし次の瞬間、身体に起きた異変にガイラスは、ドスンと床に膝を付いた。

「な、何を盛った!？」

「自分で飲んだんじゃないか」

股間を抑えて熱くなる身体に汗を滲ませるガイラス。

「だからって……こんなのおかしいだろ!!」

ソファアに座り直し、トルウは、ミルクの耳元に唇を近付け囁く。その言葉を聞いてローブを素直に取られていくミルク。『仲直りするから僕に任せて』

ミルクをトルウの膝上に乗せる。

「身体が元気になる証拠になったね」

「何をバカな……」

「でも、考えてみてよ」

「ああ？」

裸体で首輪のベルだけが装着されているミルクの両膝裏を持って、パカッと開くトルウ。目を何とか逸らしていたガイラスも元気になってしまった身体と爆乳の裸体に視線が、ガッツリ向いてしまう。

「処女のハニートラップって難しいと思わないかな？」

「しょ、処女なのか……」

ムラムラが止まらない身体は頭の思考を奪っていく。媚薬を盛ったワケではないが普段から体力が多すぎる者にとって、ミルクの回復の乳は別の元気を与えてしまうらしい。

「あ、わ、私……っ♡ きゃうっ♡」

夜に燃える炎に誘われて身を焦がす蛾の如く吸い込まれ、ガイラスは開かれた割れ目に自身の舌を入れ込んだ。

ぺちやつ♡ ねちゆ♡ ちゆる♡ ちゆるるるる♡

「こ、これえ♡ また……っ♡ なにか♡ きちやう♡ あっ♡」

ミルクのか細く漏れる甘い声にガイラスの舌使いも熱心さを増す。

「もっ♡ もれちやうっ♡」

ミルクの身体が仰け反り透明な液体が、プシヤリと飛び出してガイラスの顔にかかる。ガイラスは噴き出した潮を丁寧な舐め取ると、ドスツと机に腰を起きミルクを、うっとりで見つめて言う。

「俺が悪かった」

どうやら仲直りが出来たらしい。甘い衝撃に痙攣しながらもミルクは、ホツとしたのだった。

\*\*\*

あれから、ミルクは気持ち良くなり起きる現象を『イク』と教えられた。そして、ぐでぐでのミルクをトルウは横抱きにして寝室へと寝かせる。ぼんやりしているミルクの左右では、トルウとガイラスの会話。

「えー！」

「まあまあ、もうちょっと解してから入らなきやだよ」

「舌で二回イったしこんな濡れてんだから別によくねーか？」

服を脱ぎ捨てながら立ち上がった肉棒を取り出すガイラス。もう先に進みた

くてたまらないようだ。

「ガイラス、最初が肝心だつてよく言うだろ」

トルウの手がミルクを撫で敏感になっている彼女は甘い声を出す。

ヌプ……♡

トルウの指が一本、ミルクの膣内へ入り込んだ。舌で散々柔らかくしたからだろう指を直ぐに飲み込んで二本目も簡単に入っていく。

ヌプ♡ ヌプ♡ くち♡ くぶくぶ♡ ぬちゆ♡ ぬちゆぬちゆ♡

「ふあ♡ うあく♡ ふえ♡ あっ♡ あっ♡」

自分の膝上に寝転んだミルクの上半身を撫でながらガイラスは喘ぐ姿を見つ

め思わず眩く。

「……可愛いな」

トルウは、それに対し、ニツと微笑み指の動きを速くしていく。内側の柔らかい場所を擦られ刺激され、ミルクは、ぶるぶると震えた。

ぷしゅっ♡ ぷしゅり♡

潮が噴き出してシートが濡れる。くでーっと寝そべるミルクを愛おしそうに見つめながら、トルウは肉棒を彼女の割れ目に当てる。

にち……♡

「じゃあ……ミルクちゃん……入るね♡」

「あっ♡ んあぁ〜♡」

ミルクが伸び長く鳴く。牛の鳴き声に似た、その声を聞きながらトルウの肉棒は、ゆっくりと膣内へ納まった。

ずぶぶぶ……ぬぶぶ……ぬぶぶ……♡

「ひっ♡ んっ♡ ……っ♡」

ぬぶ♡ ぬぶ♡ ぬぶ♡ じゅぶっ♡

「あひっ♡」

じゅぶ♡ じゅぶ♡

「あぐっ♡」

ゆっくりと繰り返し繰り返し、トルウの肉棒は、ミルクの膣内を行き来し彼女を熱くさせる。処女ではあったが獣人は交わりの際、痛みを感じにくい性質なので直ぐに快樂の方へと身体は、なじんでいく。

「……あゝ♡ すごい……♡」

トルウが、うっとりと感じ入り。

「んあゝ♡ はう♡ うあん♡」

揺さぶられるミルクは、その一突き毎に感じるモノに為すがままだ。自分の膝上に乗るミルクの頬を撫でるガイラスは肉棒から我慢汁を、ぽたぽた垂らしながら自分の番を、じっと待つ。

「ひっ♡ ひうゝ♡」

ずっ♡ぬぶ♡ぬぶ♡ずぶ♡ずぶずぶ♡ばちゅっ♡じゅぶ♡じゅぶ♡ばちゅんっ♡

男女の荒い息づかいが部屋内に充満している。トルウはミルクの脚を持つと、その状態で押し奥まで肉棒を入れ込み腰を振るう。

ばちゅっ♡ばちゅっ♡ばちゅっ♡ばちゅっ♡

「ふあああ♡んむっ♡」

トルウの唇がミルクの口を塞ぐ。舌が入り込んで絡み合いながら腰は肉棒を入れ込み奥を叩く。

ちゅ♡ちゅる♡ねっちゅ♡ぱんっ♡ぱんっ♡ぱんっ♡

「……………♡♡」

奥をトントンされると愛撫では知らない奥の方からの痺れが身体に広がり、ぎゅうつとトルウの肉棒を締め付けてミルクは高みに涙を流しながら震える。

「……………♡♡♡」

その締め付けにトルウは一度息をつめると、ミルクの奥へ奥へと腰を押し付け震える。痙攣と共に、ミルクの内側に熱い液体が広がった。

びゅりゅりゅりゅりゅりゅ♡

勢い良く出た精液は、トルウによって内側に擦り付けられ白濁が生まれる。

ぬぼんっ♡

肉棒が引き抜かれ荒く息をする男女。そこへガイラスが嬉しそうに呟く。

「次は俺の番だな」

ぼーっとしているミルクを覗き込むと顔を捕まえて舌を出し絡み合わせる。

ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡♡♡ ちゅ♡♡♡♡♡ ちゅる♡

ガイラスは時間をかけてミルクと舌を絡み合わせ、舌がふやけてしまうのではと思えて来た頃、ようやく顔を上げた。

「ふえ……♡」

涎の糸が二人の間で伸びる。ガイラスは感慨深そうにミルクの乳を撫で。

「でけえ……♡」

ちよつと涙目で、そう呟くと自分の肉棒を乳房の間に挟み込む。ガイラスの

肉棒は決して小さくはないがミルクの爆乳の前では、すっぽりと内側に納まっていた。

「う、うわあ……♡ すっ♡ すげえ……♡」

ガイラスはミルクの乳房に肉棒を挟んだ状態で腰を揺らす。揺らせば柔らかい乳房の包みの中で肉棒は喜びを感じ暫くして我慢できなくなった熱が吐き出された。

「あ〜〜♡」

ドロオ〜つとした白い液体がミルクの乳房や顔に垂れる。

「僕も挟まれないな……」

トルウが布で、ミルクの乳房を拭きながら、そう呟き。

「尻も最高だよな……何で、こんな最高の身体してんだ……」

ガイラスは独り言を言いながら、ミルクをひっくり返し後ろから肉棒を入れ込む。

「ひやう♡」

「あゝ♡ 中、すげっ♡ 気持ちっ♡」

トルウはミルクの頭を撫でながら四つんばいになった彼女の乳房の間に肉棒を挟み込み。

「ミルクちゃん、気持ち良いこと僕らと覚えていこうね♡」

「ふひやつ♡ あう♡ う♡」

トルウに乳首を弄られながら肉棒を挟み。後ろからガイラスに突かされている。

ぱちゅっ♡ ぱちゅっ♡ ぱちゅんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡

「あう♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

「はあ……♡ 気持ち良いね♡」

「ひう♡ むあ♡ んあ♡」

トルウは肉棒の位置を立て入れにして、ミルクの乳房を堪能しながら唇に当ててる。

「舐めてほしいな……♡♡」

「んむっ♡ むあ♡ んむっ♡」

後ろのガイラスが揺らす度にトルウの肉棒が口内に入ってこようとす。ミルクは嘔まないよう必死に舌を使って舐め吸う。

「ん……っ♡ いいね♡ 上手♡」

トルウは御礼とばかりにミルクの乳首を擦り甘く刺激しガイラスは肉棒を締め付ける膣内に気をよくして腰の振るいを強くする。

ばちゅんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ にゆるっ♡ ちゅう、ちゅう♡

色んな音が混じり合う中、トルウが息をつめ射精しミルクの口内へ入り込む。

「ふう……♡」

こくこくと飲んで、ぺろぺろと舐めるミルク。味は全く美味しくないが残さず飲みきった。

ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡

「ミルクっ！ 俺も、出る……っ♡」

ガイラスは腰を大きく振って強く奥を叩くと後ろからミルクを抱きしめて精を吐き出す。

びゅっ♡ びゆるっ♡ びゅっ♡

「ふぁ♡ あ……♡」

「はー……♡ はー……♡」

ぬぶんっ♡

肉棒が抜かれるとミルクの股の間から白い、おしっこがプクプク溢れていく。

「じゃあ次は僕の番だね♡」

「その前に浄化魔法かけとくか……」

ガイラスが小さく呪文を唱えるとミルクの身体の汚れやシーツの染みが消えて、さらっとした肌触りへと変わる。

「ミルクちゃん♡」

何時の間にかトルウの『さん』付けが『ちゃん』付けに変わっているが、それを、どうこう思う前に彼の膝上に乗せられて抱きしめながら膣内に肉棒が入りしていく。

「あつ♡ あつ♡ あつ♡」

「……水挿しと、なんか摘まめそうなの取ってくるわ」

ガイラスがミルクの背中を撫で少し強めの口付けをすると下着を装着し出入口に向かう。

「戻ってきたら俺な」

★★★続きは本編で!!

---

---

## サンプル【回復のミルク】

発行日 2023 年 10 月 25 日

著者 いば神円(しんえん)  
<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。

---

---